

(学部)西洋哲学・(院) 哲学分野の卒業論文・修士論文の執筆要項

1. 日本語ワードプロセッサを用いることを原則とし、その場合の形式は次の通りとする。
 - (1) B5判縦を1ページとし、原則として横書きとする。
 - (2) 横書きは30字×25行(縦書きは40字×20行)を1ページの目安とする。なお欧文は半角を使用する。ただし文字記号として用いる場合はその限りではない。
 - (3) 論文「本文」は40000字以内とする。
2. 論文の体裁は、「題目」、「凡例」、「目次」、「本文」、「注」、「文献表」の順とする。論文とは別に、邦文800字以内の「要約」を添える。
3. 「題目」は、文学部学生係に提出したものと同一でなければならない。(さもなければ学生係に受理されない。) 提出期限に注意せよ。
4. 「凡例」は、略号等についての断わり書きとし、必要がなければ省略してもよい。
5. 「目次」は、論文全体の目次とし、「序(序文、はしがき)」から始まり、各「章」「結論(結語、結び)」、「注」、「文献表」のそれぞれについてページを記載すること。
6. 「本文」は、「序(序文、はしがき)」、「章」、「結論(結語、結び)」等の全体を含む。(「章」の中をさらに、「節」等に分けて論述してもよい。「章」には内容に即した見出しをつけることが望ましい。) すべてページを付し、「目次」において照応できるようにする。

なお、本文において原典を翻訳して引用する場合、その個所の原典テキストを本文中に併記するか、「注」において示すかのいずれかの方法で原文そのものを挙げる。他の人による翻訳を用いる場合も例外ではない。
7. 「注」は、「本文」中に番号を付して、「本文」の後に置く。なお、全体を通し番号にしても、章ごとに番号を付けてもよい。章ごとに番号を付ける場合は、「注」についても「章」を明記すること。ただし、後述する第一次文献の箇所に関しては、あらかじめ「凡例」で断わった略号とページ数を()内にいれて本文中に挿入してもよい。

なお、注の枚数には限定を加えない。
8. 「文献表」は、参照した一切の文献を掲げる。なお、主な研究対象としたテキスト(第一次文献)とそのテキストに関する研究書・論文の類(第二次文献)に分けることが望ましい。
9. 引用文は「」の中に入れ、数行に及ぶものは、一段下げて行を改め、本文との区別を明らかにする。引用文の出典については、それぞれ注として番号を付して明示する。また文中において表示する和文の書名、ならびに「」内の引用文には『』を用いる。
- イ、出典の表記は、原則として、単行本及び全集所収本の場合は、1: 著者名、2: 書名、3: 編者・校訂者名、4: 巻数、5: 版数、6: 発行地(和書の場合は不要)、7: 出版社名、8: 初版発行年、9: 発行年、10: 頁の順とする。3, 4は必要に応じて表記し、また、場合によっては、5, 7, 8は省略してもよい。また、雑誌掲載論文の場合は、1: 著者名、2: 論文名、(3: 雑誌名、4: 巻数、5: 発行年)、6: 頁数の順とする。書名及び雑誌名は、イタリック体またはアンダーラインで表示すること。(欧文を『』でくくるようなことはしないこと) なお、後述する *Chicago Style* やMLAに従ってもよい。

注の中での表記

例えば、単行本の場合、W.K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy*. Vol. I, Cambridge, 1962, p. 45.

雑誌論文の場合、H. Maier, Die Echtheit der Aristotelischen Hermeneutik. (*Archiv für Geschichte der Philosophie*. Bd. 13. 1899) S. 35.

編者・校訂者のある場合、Aristoteles, *Ethica Nicomachea*. recog. F. Susemihl, Lipsiae, Teubner, 1887, S. 280.

文献表での表記

例えば、単行本の場合、Guthrie, W. K. C. : *A History of Greek Philosophy*. Vol. I, Cambridge, 1962.

雑誌論文の場合、Maier, H. : Die Echtheit der Aristotelischen Hermeneutik. (*Archiv für Geschichte der Philosophie*. Bd. 13. 1899) S. 35.

編者・校訂者のある場合、Aristoteles, *Ethica Nicomachea*. recog. F. Susemihl, Lipsiae, Teubner, 1887, S. 280.

なお、巻数 (出版年)、ページ数のみを記載する方式もあるので、それでもよい (MLA や *Chicago Manual of Style* を参照)。

ロ、 文中において人名、書名、事項・引用語 (文) に外国語を付す場合は、() に入れる。ただし、書名の場合はイタリック体 (にできない場合は、アンダーライン) を用い『存在と時間』 (*Sein und Zeit* または Sein und Zeit)、事項等の場合は「存在」 (Sein) とする。

10. 略号を使用するときは、「凡例」等で明記する。また、反復するときは, *ibid.*, *ditto*, *op. cit.*, *loc. cit.*, *ders.* (*dies.*, *dass.*), *a. a. O.* などを用いてもよいが、最近では、なるべく使わない指針が MLA や *Chicago Manual of Style* で示されている (参考文献を見よ)。略号は原則として常用されるものが望ましい。例えば、

CP = *Classical Philology*, CR = *Classical Review*

11. 外国文をもって起草する場合は、一応指導教員に申し出ること。

(注意)

1. 提出した論文は、電子テキストデータとして西洋哲学教室に保管するものとする。従って論文提出後、自分の論文をテキストファイル化して研究室に提出すること。
2. 文学部学生係 (支援室) は提出期限を過ぎて論文題目を原則として受け付けることはないから、各自で期限を確かめ、遅滞の無いよう注意すること。論文提出期限も同様である。
このことについては、広島大学文学部細則第14条、広島大学大学院文学研究科細則運用方針第4条参照のこと (2004年4月に改定される当該の細則等による)。
3. 論文作成に当たっては、各自指導教員と十分に相談すること。

以上

参考文献

- 1) *The Chicago Manual of Style*, 14th ed., Chicago, The University of Chicago Press, 1993.
- 2) ジバルディ/アクター (原田敬一訳編), 『MLA 英語論文の手引き』第3版, 北星堂書店, 1990.
- 3) 中村健一, 『論文執筆ルールブック』, 日本エディタースクール出版部, 1988.
- 4) 斎藤孝, 『増補 学術論文の技法』, 日本エディタースクール出版部, 1989.
- 5) 日本エディタースクール, 『パソコンで書く原稿の基礎知識』, 日本エディタースクール出版部, 2001.